

桜美林論考

The Journal of J. F. Oberlin University

自然科学・総合科学研究

Natural and Applied Sciences

2019 年 3 月

March 2019

桜美林大学 自然科学系／総合科学系

J. F. Oberlin University Divisions of Natural Sciences / Integrated Sciences

スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第4報）  
— コスタリカ共和国における野球ボランティア活動の成果と学生の成長 —  
A Study Regarding the Fostering of Global Human Resources through  
Sports (Report No.4) : Outcome of Baseball volunteer activities in  
Republic of Costa Rica

宮崎 光次<sup>※1</sup>

キーワード： スポーツ, 野球, コスタリカ, 学而事人, グローバル人材, JICA

## 要約

2018年2月5日から3月5日までの1ヶ月間、本学野球部員10名がコスタリカ共和国（以下、コスタリカとする）に派遣され、野球の普及・振興に関わるボランティア活動を行った。

2016年の第1回活動では1,222名、2017年の第2回活動では1,630名、そして、今回の第3回活動では、1,883名に対して指導を行った。活動では、野球の技術と共に、礼儀や感謝の気持ちを持つことなど日本人が大切にしているメンタリティや日本文化を伝えることができた。

特に、3回目の活動となり本学学生によるベースボール型授業が洗練されてきたことは大きな成果と言える。しかしながら、第2回活動で行ったコスタリカ人教員自らが小学生にベースボール型授業を指導するという試みが、定着していないという現状も確認できた。

また、これまでに参加した学生が、このボランティア活動を通して刺激を受け、JICA長期隊員としてブラジルに派遣されたり、コスタリカで学校対抗のスポーツ大会を開催したりと新たなチャレンジをしている。この活動は、スポーツによる国際貢献、「学而事人（かくじじん）」（学びて人に仕える）の実践、グローバル人材育成のために大いに役立っていると考えられる。

## 1. はじめに

「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第1報）—コスタリカ共和国における野球指導—」<sup>1)</sup> で伝えた通り、桜美林大学は、独立行政法人国際協力機構（通称 JICA、以下 JICA とする）と連携ボランティア派遣事業実施で合意し、2016年から2020年の5年間、毎年1ヶ月程度、野球部員10～15名をコスタリカに派遣し、野球

---

※1 MIYAZAKI, Mitsuji 桜美林大学総合科学系

の普及・振興に貢献するとともに、ボランティア経験を通じてグローバル人材の育成を図ることとなった。

本研究の目的は、コスタリカ国内で行った第1回、第2回の活動での成果と課題を踏まえて行った第3回活動（2018年2月から1ヶ月間）を紹介すること、および、この3年間の活動を通して、参加した学生の変化を考察し、グローバル人材の育成に繋がっているかを検証することである。

## 2. 第1回、第2回活動で見えた課題

第1回活動（2016年2月4日から3月4日の1ヶ月間）では、サントドミンゴ野球協会に所属する選手を対象とした野球教室、小学校における野球教室、体育教員養成大学での野球講習会、および、コスタリカ代表チームとの試合を通して、小学生から大人まで延べ1,222名に対して野球指導を行い、技術と共に礼儀や感謝の気持ちを持つことなどを伝え、大きな成果を上げた<sup>2)</sup>。

また、道具不足、グラウンドの環境が悪いなどの現状が把握できた。さらに、1ヶ月間と言う短期間で単発的な指導では、野球の魅力、本当の楽しさを伝えることまでは到達できず、野球競技人口の大幅な拡大は見込めないことが分かった。

そこで、第2回活動（2017年2月7日から3月6日の1ヶ月間）では、道具不足を補うために、コスタリカ人と共に「手作りバット」、「手作りTスタンド」、「グラウンド整備用具トンボ」を作成した。加えて、道具を大切に、少しでも長持ちさせるメンテナンスの方法を伝えた。また、グラウンドの環境を良くするために、グラウンド整備の重要性や整備方法も伝えた<sup>3)</sup>。これらは、大変コスタリカ人に好評で、工夫すれば道具不足を補えること、特に小学校低学年では、規制のバットよりも軽く、多少軟らかい手作りバットは非常に重宝された。また、グラウンド整備についても、少しずつではあるが定着してきた。さらに石ころの多いグラウンドを整備したい、もっと効率的に練習できるための道具が欲しいなどの要望も出された。

さらに、野球競技人口拡大のための施策として、JICA中南米ベースボール型授業促進セミナー（以下、セミナーとする）を開催した。コスタリカ人教員自らが、授業の中で、野球あるいは野球に近いゲームが指導できるようにしようという試みである<sup>4)</sup>。セミナーには、延べ327名のコスタリカ人教員が参加し、熱心に取り組んでいた。今後は、学校体育の中にベースボール型授業を普及拡大していくことが重要であると考えた。

## 3. 課題を踏まえての第3回活動

第1回、第2回の活動から得た知見を活かし、第3回の活動を行った。以下にその内容を示す。

## (1) 新たな道具の作成

第1回、第2回の活動を通し、道具不足が深刻であることが理解された。中でも現地に赴いたからこそ分かった実情がある。

その1つが、日本では野球場に多く用意されているネットがないことである。バッティング練習をするにしても、通常のバッターボックスに立ち1人ずつしか練習ができない。そこで、今回の活動では集球ネット（写真1）を作成した。このネットに向けてバッティング練習（ティーバッティング）を行うと、打ち出されたボールがネットの中に納まりボールを拾う時間を短縮することが出来る。また、守備練習の際に、一塁に置けば、一塁手がいなくとも、内野手が送球練習をすることも出来る。さらに、捕手の代わりに置けば1人でネットに向かってピッチング練習をすることも出来る。この集球ネットは第1回活動時から、派遣された学生が、あったら良いと感じていた道具である。また、第2回活動時のセミナーでも、各国 JICA 長期隊員が熱望していた。

すべての部材を現地で調達しようと試みたが、ナイロン製のネットはコスタリカの建築材料量販店では購入できなかった。そこでネットだけは日本から持参し、その他の鉄パイプ、キャスター（移動時の負担を軽減するためのタイヤ）は現地で購入、溶接、組み立てなどの作業（写真2）もコスタリカ人と一緒に行い、2台を作成した。

また、帰国後もコスタリカ人だけで修理、及び、新たに作成できるように、設計図を作成、寄贈した。



写真1. 集球ネット



写真2. 集球ネットの作成作業



写真3. 篩(フルイ)の扱い方指導

## (2) グラウンド整備の定着

コスタリカのグラウンドには石が多い。アメリカ式のグラウンドで、内野にも芝が敷き詰められている。土の部分は、走路とベース周りのみであるが、ここに石が多い。打球がぶつかればイレギュラーバウンドするし、スライディングをすれば足を擦りむいてしまう。そこで日本の篩（フルイ）を持参し、これを用いて、石を取り除いた（写真3）。

また、グラウンド整備の定着化も図った。第2回活動では10本のトンボを作成し、利

用方法を伝え、グラウンド整備を行える準備を整えた。しかし、今回訪れた際には、2本は折れた状態で倉庫に放置されており、数本は真新しい状態で残っていた。何とかグラウンド整備を定着させるべく、部員は練習後、毎回率先してグラウンド整備にあたった。その甲斐もあり、帰国前には、学生よりも先にグラウンド整備を始める選手が出てきた。次回、活動の際には、是非、定着していて欲しいと思う。

### (3) サントドミンゴ野球協会での活動

#### 1) 野球指導

派遣受け入れ先となっているサントドミンゴ野球協会に所属している子ども達に対して野球指導を実施した。年齢は多岐にわたり、就学前の子どもから高校生までが対象である。練習は、毎週火、木曜日の夜に2時間30分程度(18:30～21:00)行われた。通常は、JICA長期隊員1名で行っているが、本学学生が派遣されている間は、大勢で指導できるため、ポジション別の練習や守備、バッティング、ピッチングの個別指導など、普段より質・量ともに優れた良い練習が出来たと思う。特に、今回はこれまでの活動で実施できなかったキャッチャー、外野手の練習方法を新たに紹介した。また、キャッチボールのドリルも増やした。

#### 2) 親善試合

親善試合は、2試合行い本学の2連勝であった。

桜美林大学 ○ 10 — 2 ● U-20 サントドミンゴ選抜 (2月17日)

桜美林大学 ○ 15 — 4 ● コスタリカ選抜 (2月18日)

しかし、コスタリカ選手の身体能力の高さ、向上心、積極性を感じられた内容であった。

#### 3) 審判員への指導

これまでの活動では、審判員への指導については何もできていなかったもので、今回の活動では、小学生同士の試合で本学学生4人が審判員を務めた。機敏な動き、大きなジェスチャー、正確な判断など、参考になったと大いに褒めてもらった。中学生の試合では、コスタリカ人審判員と協働して本学学生が審判員を務め、試合を進行した。この試合で審判員を務めた学生の感想は、

①ジャッジに対してクレームをつける選手が多い

②無用なタイムをかける選手が多い

そのため、スピーディーな試合が行えず、試合時間が延びるというものであった。

今後は、審判員の技能向上を図るとともに、審判員をリスペクトする態度・行動およびスピーディーな試合運びができるよう選手にも指導していきたいと思う。

#### (4) 小学校におけるベースボール型授業の普及

これまでの活動に続き今回も、小学校においてベースボール型授業を行った。事前学習として、ジャイアンツアカデミーの野球教室を見学し、子ども向けの指導方法を学んだ。さらに、ジャイアンツアカデミーで用いている指導メソッドをスペイン語に翻訳した指導教本「Clase “Tipo Beisbol” Sencilla」<sup>5)</sup>を参考に、独自の小学校授業での指導案を作成した。また、これまでの経験を活かし、動きを指示する言葉や説明によく使う言葉などをスペイン語で十分に話せるようにして臨んだ。良く聞かれる質問に対しても対応できるように準備した。

現地では、毎晩ミーティングを行い、生徒の人数や年齢、レベル、授業を行う環境に応じて授業内容を工夫するなど事前準備を徹底すると共に、手作りバット、手作りTスタンドを用いて活動を効率よく進めた。主な指導内容は、以下の通りである。

- ①準備体操（日本の体育で行なっているもの）
- ②ランニング（足を合わせて行う）
- ③ドリル（ゴロ転がし、フライキャッチ、バッティング、守備など）
- ④ゲーム（バックホームゲームなど）
- ⑤整理体操（日本の体育で行なっているもの）

また、第2回活動中に行ったセミナーには、延べ327名のコスタリカ人教員が参加した。このセミナーに参加したコスタリカ人教員によるベースボール型授業がどの程度普及しているのか確認した。その結果、手作りバット、手作りTスタンド、フラフープなどの道具は揃っているものの、積極的にベースボール型授業を実施している小学校は多くなかった。この点は、次回活動での大きな課題である。

#### (5) 大学生を対象とした野球の普及活動

第1回、第2回の活動に引き続き、今回もコスタリカナショナル大学を訪れ、ベースボール型授業普及のための活動を行った。この活動では、手作りバットを作成、これを用い、バッティング練習や試合を実施した。参加者は、体育専攻の学生50名であり、その多くが将来教員になるので、コスタリカでの野球普及のカギになると思う。

また、今回初めて、コスタリカ工科大学を訪問、野球の指導を行った。まず、コスタリカ工科大学生の指導で「ズンバ」と呼ばれる音楽に合わせた激しい踊りをウォーミングアップとして20分程度行った。その後、本学学生がキャッチボール、ゴロ捕球、フライ捕球を指導、野球の試合へと進み、技術指導とともに交流を深めた。

#### (6) 地方都市での野球の普及

カリブ海沿岸の都市リモン、北部の都市サンカルロスで、各2校の小学校を訪問し、延べ106人の子ども達にベースボール型の授業を実施した。

また、リモン野球協会が参加を呼び掛けた子ども達22名に対して野球指導を実施、終

了後には使用した野球用具を寄贈した。また、成人の選抜チームと親善試合を行い、本学が勝利した。

桜美林大学 ○ 19 — 0 ● リモン選抜チーム (2月13日)

#### (7) 日本文化の紹介

ベースボール型授業のために小学校を訪問した際、いくつかの学校で、けん玉、折り紙、コマ、大縄を使って日本の昔遊びの紹介を行った。1番人気のあった遊びはけん玉で、女子に人気だったのが折り紙、男子は大縄であった。子ども達も笑顔で楽しそうに遊んでいたのが印象に残っていると学生は話していた。

#### (8) 学生交流

コスタリカナショナル大学の日本語クラスの授業に参加し交流を図った。まず、自己紹介に始まり、どんなことを学んでいるかなどお互いに質問し合い、その後、伝言ゲームを日本語、スペイン語を駆使して行った。また、けん玉、折り紙、コマといった遊びも一緒に楽しんだ。

同世代ということもあり、非常に良い交流が出来た。特に大学生は、皆英語が話せたのも交流を深める大きなポイントであったと思われる。

#### (9) ホームステイ

2月23日から2月26日の3泊4日の日程で、1人ずつ、別々の家庭でホームステイを行った。ホストファミリーは、サントドミンゴ野球協会に所属する選手の家族である。学生は野球場での指導の時間だけでなく、コスタリカの家庭で過ごす時間や小旅行で大いに楽しんだ。家庭に入り家族と交流することは、異文化理解やスペイン語能力向上に大いに役立ったと考える。

以上の活動を通し、今回は1,883名に対して野球指導を行った。第1回から第3回(今回)までの指導した人数の推移を表1にまとめた。

表1 指導した人数の推移

項 目		2016年	2017年	2018年
サントドミンゴ野球協会での野球指導（野球教室）		262名	238名	484名
地方都市小学校でのベースボール型授業 および野球教室	ラクルス野球教室	57名	－	－
	サンカルロス小学校授業	103名	－	42名
	ウパラ野球教室	－	20名	－
	リモン小学校授業	－	－	42名
	リモン野球教室	－	－	22名
都市部小学校でのベースボール型授業		648名	497名	1,102名
親善試合		92名	70名	93名
大学での野球授業・日本語授業	UNA・UTN	60名	50名	98名
小学校教員向けベースボール型授業研修会	教員	－	327名	－
	小学生	－	428名	－
合 計		1,222名	1,630名	1,883名
前年比		－	133.40%	115.50%

#### 4. グローバル人材の育成

2016年の第1回活動を通して学生は大いに成長した。さらに、第1回活動の成果・課題を踏まえ、準備し臨んだ、第2回活動では更に変化があった。そして、今回の第3回活動では、これまでの活動が受け継がれ、自らが課題を持って行動できるようになった。ここでは3年間の活動を通し、学生の成長を考察するとともに、グローバル人材の育成の成果を検証する。

##### (1) 活動に参加した学生数

第1回活動から第3回活動まで、参加した学生は延べ30名である（表2）。

表2 活動に参加した学生数

	第1回活動（2016年）	第2回活動（2017年）	第3回活動（2018年）
4年生	1	3	0
3年生	8	2	6
2年生	0	6	4
合計	9	11	10

このうち3名が第1回活動、第2回活動の両方に参加した。また、2名が第2回活動、第3回活動の両方に参加した。このように複数名が連続して参加することにより、活動



内容、課題等が継承され、連続性のある活動になっている。

また、2回目の参加となる学生は、初めて参加する学生に比べ、スペイン語の能力が高いこと、コスタリカについての知識があること、既に知っているコスタリカ人がいることなど多くのアドバンテージがあり、その力を発揮し、リーダーとして活躍してくれた。

## (2) 参加学生による報告会

3月6日、JICA職員2名、本学野球部員約150名が参加、メディア取材も2社あり、報告会が行われた。

発表を終え、JICA課長からは、「国際協力の基本である『指導させてもらう』姿勢や物を現地で調達して現地の人に覚えてもらう体制ができて素晴らしかった」との高い評価を頂いた。

また、報告会を終えた10人は、学長室を訪れ帰国の挨拶をした。三谷高康学長（当時）からは、「ベースボールではなく日本の『野球』を通して支援することで、学生自身も成長し、この貴重な体験が卒業後の目標を形成する礎になっている」と労いの言葉を頂いた<sup>6)</sup>。

お二人の言葉からも分かる通り、この活動は、国際貢献であり、かつ、学生自身も成長し、国際人へと成長する機会であると考えられる。

## (3) 短期ボランティアから長期派遣隊員へ

第1回活動に参加し、2018年3月に本学を卒業した卒業生が、2018年7月9日、JICAボランティア長期派遣隊員として、ブラジル・サンパウロへ向い、現地の子ども達に野球を教える任務に就いた<sup>7)</sup>。

この卒業生は、コスタリカで約1ヶ月間ボランティアとして、現地の子ども達に野球を教えた経験を通して、改めて海外で野球を教えたいと、ブラジルでの2年間の長期派遣を志願した。

長期派遣隊員としてのブラジルでの活動に関し、卒業生にインタビューを行った。

### 1) 長期派遣隊員に応募したきっかけは？

小さいころから野球をしており、高校でも甲子園大会に出場した。桜美林大学で野球部に入部したものの、思うような結果が出せていなかった。そんな時、JICAと桜美林大学が連携し「1カ月間コスタリカの子どもたちに野球を教える」というボランティア活動が始まることを知った。今まで培ってきた野球の知識や技術を発揮できる絶好の機会と思い活動に参加した。楽しいこと、苦しいこといろいろと経験した。その後、米国への語学留学も経験、帰国後、大学卒業を控えて進路に悩んでいた時、言葉の壁を越えて身ぶり手ぶりで触れ合ったコスタリカの子ども達の笑顔が脳裏に浮かんだ。その時、今、自分が遣りたいことは、海外で野球を教えることだと気づき、ブラジルへの2年間の長期派遣を志願した。

## 2) 長期派遣隊員の任務は？

卒業した2018年4月以降は、現地の言語（ポルトガル語）や習慣、安全対策など、JICAでの派遣前訓練（研修）を受け、派遣の準備を進めた。

7月にブラジル・サンパウロに到着、ここでは、現地での訓練（研修）を1ヶ月間受けポルトガル語の習得に励んだ。

8月に赴任地であるコチア（サンパウロ州）に入り、日系ブラジル人の子ども達（9～11歳）に野球を教えている。ブラジルでも、コスタリカでのボランティア活動と同様、野球を知らない子ども達に、野球を知ってもらい、少しでも技術が向上するように指導したいと考えていた。

しかし、赴任地には日系社会という存在があり、日系ブラジル人の子ども達は、野球を理解し、ある程度の高いレベルで野球をしていた。カテゴリーによっては日本の同学年の子ども達とも互角に戦えるのではないかとも思える程である。

現在のところ、どのカテゴリーを指導するかは正式決定していない。よって、色々な年代の子ども達を指導している。こちらに来て地域大会に2回同行したが、いずれも優勝した。嬉しい反面、このチームにボランティアは必要なかと困惑する場面もある。しかし、技術を教えることだけが使命とは考えていないので、子ども達の成長のため、ブラジル社会の発展のために、是非、貢献したいと思う。

## 3) 赴任地に到着し約2ヶ月が経つが、これまでの活動で感じたことは？

語学に関しては毎日子ども達と話しながら少しずつ覚えている。また、ある学校の先生を紹介してもらい週2回、約1時間、Skypeなどを利用して学習をしている。少しずつではあるが上達してきたと感じている。

日常生活では、街で窃盗事件が多発しているため、安全には気をつけている。普段バスを待っている時でも、日本のように音楽を聴き、携帯をいじったりはできない。家から一歩出れば安全ではないという危機意識が身に着き、自分の身は自分で守ることを学んだ。

野球指導では、他の指導者が何を考えているか、保護者の考えることは何かなど、コミュニケーションをとることが大切だと感じている。お互いに理解を深め、より良い活動がしたい。そして、指導するチームを日本に連れて行き、日本の子ども達と対戦できたら良いと思っている。

さらに、地元クラブチームに所属する高校生の練習も見ると予定なので、2020東京オリンピックに出場させたいと考えている。

## (4) 短期ボランティアからコスタリカでの新たなプロジェクトへ

第1回活動、第2回活動に連続して参加した卒業生（現在、大学院2年生）と第3回活動（2018年）に参加した学生（4年生）が、コスタリカで2018年9月、首都サンホセ近郊の私立校2校を対象に、バスケットボールとサッカーの学校対抗戦を企画・運営

した。

これらの活動に関し、卒業生・学生にインタビューを行った。

## 1) プロジェクトの内容は？

2018年9月、コスタリカにて、現地の中高生を対象とした学校対抗のスポーツ・リーグ(チャリティ・マッチ)の開催を企画した。今回のプロジェクトは、勝敗のみならず、スポーツを通して同国のスポーツ・体育の普及と社会問題解決を目指した、持続可能な新しいスタイルの学校対抗スポーツ大会実施が目的である。

具体的には、首都・サンホセ近郊の私立校2校を対象にバスケットボール、サッカーの試合を、各校の体育館やスタジアムで「ホーム&アウェイ」方式で実施する。試合会場(学校)では、今回のプロジェクトにスポンサーとして支援する企業がブースを設置し、商品の販売や顧客獲得の機会を設けることができるよう企画した。地方では体育教育の普及が遅れており、用具不足や教員不足が問題となっているため、大会で集まった資金の一部を物資購入および体育教員の指導講習会に充てる計画である。

また、今回の大会では実現できなかったが、コスタリカ国立献血バンクと協力し、大会期間中は、来場者や生徒を対象とした献血・HIV検査ブースや、保健衛生および健康知識啓発ブースも設置する予定である。単発で終わるのではなく、継続的に行い、現地に根付く大会にすることを目指している。

## 2) プロジェクトを計画したきっかけは？

今回の学校対抗戦を企画するきっかけになったのは、野球部員として1ヶ月間コスタリカに滞在し、野球の普及活動を行った「JICA 桜美林大学連携ボランティア派遣事業」である。これは、青少年犯罪率やHIV感染率の上昇などの社会問題に対して、野球による健全な青少年の育成によって解決のきっかけをつくることを目的のひとつとしており、小学校の体育でベースボール型授業を普及させることを目指している。

しかし、活動を通じて野球の普及以前に、コスタリカにおける体育の問題を目の当たりにした。コスタリカは、識字率が97.8% (2015)<sup>8)</sup>とラテン・アメリカ諸国のなかでは教育水準は高い国である。しかし、体育教育に関しては、国が定めたカリキュラムは存在するものの、多くの学校で体育教員が十分に確保されておらず、およそ11万7千人の小学生(同国内の小学生30%に相当)が体育教育を十分に受けていないというデータが出されている(2016)<sup>9)</sup>。また、体育施設に関しては、同国に学校設置基準がないため、体育館もしくはグラウンドがなく、コンクリートで簡易的に設置された狭い広場で体育が実施されているところもある。また、体育教具に関しては保護者が資金を出し合って購入するなど、体育・スポーツには同国・教育省から十分な予算が割り当てられていないのが現状である。

さらに、コスタリカでは小学校から教科担任制度をとっているが、教員は学位(学士)

のみで、どの教科においても教員になることができる。これらに加え、特に地方では体育教育に予算が十分に充てられていないことから、専門性が十分でない教員が、比較的实施が容易なサッカーを授業内容に選択する場合がほとんどである。しかもボールを渡したあとは自由にさせるという授業を多く目にした。

これらのデータと自身の経験から、コスタリカが抱える社会問題の解決に、スポーツを通じて寄与するためには、海外からボランティアを招き体育やスポーツの指導を実施するのみならず、現地の学校、企業、団体などが主体となり、スポーツと体育の価値を広め、健康教育に意識を向けさせることが重要であると考えた。

### 3) 今回のプロジェクトで学んだことは？

#### ①「情報」の必要性

プロジェクトを企画・運営するにあたり、開催する地域、人口、スポーツの実施状況、文化、関わる人の性格など詳細な情報が必要であった。情報を持つておくことで、海外の活動ではあったが不安が軽減され、精神的に少し落ち着くことができた。

また、日本人の感覚で物事を進めるのではなく、現地の習慣、文化を学び、情報を得て活動しなければならないと強く感じた。

#### ②「優先順位」の重要性

プロジェクトには予期せぬことが多く起きた。その中で何が大事であるか、何を先にすべきか、という優先順位を決めることが大切であると感じた。決断するには、情報と共に経験が必要である。

今回は多くの失敗をしたが、失敗から学び、次の行動ができた。この経験が、より良い選択、優先順位決めに大いに役立ったと感じている。そして、決めたら実行、検証、改善を繰り返すことで、より良い活動になっていくと思う。

#### ③「マーケティング能力、語学力」の必要性

スポーツ大会運営には、人は何に興味があるのか、どのような情報発信手段が有用なのかなど、マーケティング能力が必要だと感じた。さらにコミュニケーション能力や言葉遣いは世界共通で重要であることが分かった。特に、海外での活動になると語学力が非常に重要となる。

今回、スポンサーとの対応、学校との交渉等、全てスペイン語と英語で対応した。そういう意味で、語学力に自信がついた。

#### ④「足繁く通う」ことの重要性

日本でも、スポンサーを募るため、数社の方と会った。資金援助はなかったが、いろいろなアドバイスを頂いた。また、打合せも綿密で、細かいところまでしっかりと詰めてい

く感じがした。

一方、コスタリカでは、「出来る、遣る」と軽く返事をするが、最後はキャンセルすることが多くあった。そんな中、プロジェクトを進めるためには、計画、準備をしっかりとる必要があることを痛感した。また、面識が持てた後も、メールを出しても返信がなく、直接話すこと、足繁く通うことが大切であることを学んだ。

このように、短期ボランティアがきっかけとなり、新たな国際貢献活動を実施している卒業生、学生がいる。そして、活動を通じ、異文化理解が進み、語学力が向上し、世界で活躍できる人材へと近づいている。その第一歩として、「JICA 桜美林大学連携ボランティア派遣事業」は大いに役立っていると考えられる。

## 5. おわりに

第1回活動では、1,222名に対して野球指導を行い、「技術と共に礼儀や感謝の気持ちを持つこと」などを伝え、大きな成果を上げた。しかしながら、道具不足、球場環境の不備、競技人口拡大の難しさという課題が見つかった。

第2回活動では、「野球の道具を与えるのではなく、道具の作り方を教える」をテーマとし、コスタリカ人自らの手で、道具を作り、環境整備をし、野球の普及・振興を図れるよう試みた。そして、小学生から大人まで合計1,630名に野球指導を行い、更なる成果を上げた。

第3回活動では、「コスタリカ人教員によるベースボール型授業の普及について確認すること」をテーマとし、1,883名に野球指導を行った。参加学生も異文化の中に入り、試行錯誤しながら、多くの人と時間を過ごすことで、様々なことを学び成長した。

学生・卒業生のインタビューからは、ボランティア活動に対する意識、国際協力に関する関心、語学力が高まったことが明らかになった。さらに、進路選択にも大きく影響していることが分かった。

本活動は、スポーツによる国際貢献、「学而事人（がくじじん）」（学んで人に仕える）の実践である。この活動を通して、グローバル人材の育成が着実に図られていることが明らかになった。

コスタリカでの野球支援活動は2020年まで続く。

## 引用・参考文献

- 1) 宮崎 光次, 「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究 (第1報) -コスタリカ共和国における野球指導-」, 桜美林論考『自然科学・総合科学研究』, 第7号, pp95-112, 2016

年3月

- 2) 宮崎光次, 「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究(第2報) - 2016年コスタリカ共和国における野球指導-」, 桜美林論考『自然科学・総合科学研究』, 第8号, pp37-50, 2017年3月
- 3) 宮崎光次, 「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究(第3報) - 2年間の年コスタリカ共和国における野球ボランティア活動の成果-」, 桜美林論考『自然科学・総合科学研究』, 第9号, pp75-86, 2018年3月
- 4) 宮崎光次, 「コスタリカ共和国におけるベースボール型授業導入の試み」, 桜美林論考『教職研究』, 第2号, pp71-80, 2017年8月
- 5) Yoshinori Okade, 「Clase “Tipo Beisbol” Sencilla」, Nippon Professional Baseball
- 6) 桜美林大学, 「コスタリカ野球支援報告会が行われました」, 2018年3月8日,  
[https://www.obirin.ac.jp/info/year\\_2017/r11i8i000001wol4.html](https://www.obirin.ac.jp/info/year_2017/r11i8i000001wol4.html)
- 7) 千葉日報, 「野球指導で新たな挑戦 元甲子園球児、ブラジルへ」, 2018年7月19日 1面
- 8) 二宮書店編集部, 「データブック オブ・ザ・ワールド-世界各国要覧と最新統計- 2016 Vol. 28」, 二宮書店, pp417, 2015年12月
- 9) La Nacion, 「Más de 117.000 niños no reciben educación física en la escuela」, 2016年9月27日,  
<https://www.nacion.com/puro-deporte/otros-deportes/mas-de-117-000-ninos-no-reciben-educacion-fisica-en-la-escuela/T6SLA6GMBBYYJMRQCMSZCZOFMY/story/>

